

1. 次の行列式の値を求めよ。

(a) $\begin{vmatrix} -1 & 2 \\ -5 & 3 \end{vmatrix}$

$$\begin{vmatrix} -1 & 2 \\ -5 & 3 \end{vmatrix} = (-1) \times 3 - 2 \times (-5) = 7 \quad (1)$$

(b) $\begin{vmatrix} 4 & 2 & -2 \\ -5 & 3 & 2 \\ -2 & 4 & 1 \end{vmatrix}$

3 列目を 2 倍して 1 列目に加え、2 列目には 1 倍して加えると 1 行目の 2 つの成分が 0 になる。これを利用し、 2×2 の行列式に変形し計算を行う。

$$\begin{vmatrix} 4 & 2 & -2 \\ -5 & 3 & 2 \\ -2 & 4 & 1 \end{vmatrix} = \begin{vmatrix} 0 & 0 & -2 \\ -1 & 5 & 2 \\ 0 & 5 & 1 \end{vmatrix} \quad (2)$$

$$= (-2) \begin{vmatrix} -1 & 5 \\ 0 & 5 \end{vmatrix} \quad (3)$$

$$= (-2) \times (-1) \times 5 = 10 \quad (4)$$

(c) $\begin{vmatrix} 2 & 0 & 1 & 5 \\ 2 & 4 & 7 & 1 \\ 2 & 6 & 0 & 9 \\ 1 & 0 & 3 & 2 \end{vmatrix}$

4 行目を 2 倍し他の行から引くと 1 列目に 0 が 3 つ並ぶのでこれを利用し 3×3 の行列式に変形する。

$$\begin{vmatrix} 2 & 0 & 1 & 5 \\ 2 & 4 & 7 & 1 \\ 2 & 6 & 0 & 9 \\ 1 & 0 & 3 & 2 \end{vmatrix} = \begin{vmatrix} 0 & 0 & -5 & 1 \\ 0 & 4 & 1 & -3 \\ 0 & 6 & -6 & 5 \\ 1 & 0 & 3 & 2 \end{vmatrix} = -1 \begin{vmatrix} 0 & -5 & 1 \\ 4 & 1 & -3 \\ 6 & -6 & 5 \end{vmatrix} \quad (5)$$

3 列目を 5 倍し 2 列めに加え、 2×2 の行列式に変形する。

$$- \begin{vmatrix} 0 & -5 & 1 \\ 4 & 1 & -3 \\ 6 & -6 & 5 \end{vmatrix} = - \begin{vmatrix} 0 & 0 & 1 \\ 4 & -14 & -3 \\ 6 & 19 & 5 \end{vmatrix} = - \begin{vmatrix} 4 & -14 \\ 6 & 19 \end{vmatrix} \quad (6)$$

ここから行列式は次のように求められる。

$$- \begin{vmatrix} 4 & -14 \\ 6 & 19 \end{vmatrix} = -(4 \times 19 - (-14) \times 6) = -160 \quad (7)$$

2. 正方行列 A が ${}^tAA = E$ を満たす時、 $|A| = \pm 1$ を示せ。ただし、 $|{}^tA| = |A|$ は用いてもよい。

${}^tAA = E$ より $|{}^tAA| = |E|$ である。 $|E| = 1$ であるので、 $|{}^tAA| = 1$ である。

$|{}^tA| = |A|$ より $|{}^tAA| = |{}^tA||A| = |A|^2$ であるので、 $|A| = \pm 1$ である。

3. 行列式 $\begin{vmatrix} a & b & b \\ a & b & a \\ b & a & a \end{vmatrix}$ について、第 1 列に関する余因子展開を用いて因数分解せよ。

$$\begin{vmatrix} a & b & b \\ a & b & a \\ b & a & a \end{vmatrix} = a \begin{vmatrix} b & a \\ a & a \end{vmatrix} - a \begin{vmatrix} b & b \\ a & a \end{vmatrix} + b \begin{vmatrix} b & b \\ b & a \end{vmatrix} \quad (8)$$

$$= a(ba - a^2) - a(ba - ba) + b(ba - b^2) \quad (9)$$

$$= a^2(b - a) + b^2(a - b) \quad (10)$$

$$= (b - a)(a + b)(a - b) \quad (11)$$

4. $A = \begin{pmatrix} 2 & 1 & 3 \\ 1 & 3 & 1 \\ 3 & 2 & -4 \end{pmatrix}$ が正則であることを確かめ、余因子行列を用いて逆行列を求めよ。

.....
 $|A| = -42 \neq 0$ より A は正則である。そこで逆行列を余因子行列を用いて求める。

$$A^{-1} = \frac{1}{|A|} \begin{pmatrix} \begin{vmatrix} 3 & 1 \\ 2 & -4 \end{vmatrix} & -\begin{vmatrix} 1 & 3 \\ 2 & -4 \end{vmatrix} & \begin{vmatrix} 1 & 3 \\ 3 & 1 \end{vmatrix} \\ -\begin{vmatrix} 1 & 1 \\ 3 & -4 \end{vmatrix} & \begin{vmatrix} 2 & 3 \\ 3 & -4 \end{vmatrix} & -\begin{vmatrix} 2 & 3 \\ 1 & 1 \end{vmatrix} \\ \begin{vmatrix} 1 & 3 \\ 3 & 2 \end{vmatrix} & -\begin{vmatrix} 2 & 1 \\ 3 & 2 \end{vmatrix} & \begin{vmatrix} 2 & 1 \\ 1 & 3 \end{vmatrix} \end{pmatrix} \quad (12)$$

$$= \frac{1}{-42} \begin{pmatrix} -14 & 10 & -8 \\ 7 & -17 & 1 \\ -7 & -1 & 5 \end{pmatrix} \quad (13)$$

$$= \begin{pmatrix} \frac{1}{3} & -\frac{5}{21} & \frac{4}{21} \\ -\frac{1}{6} & \frac{17}{42} & -\frac{1}{42} \\ \frac{1}{6} & \frac{1}{42} & -\frac{5}{42} \end{pmatrix} \quad (14)$$

5. 以下の問いに答えよ。

- (a) 3次元ベクトル $\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \mathbf{a}_3$ が線形独立であることの定義を述べよ。

.....
 $\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \mathbf{a}_3$ が線形独立であるとは、3つのスカラー s_1, s_2, s_3 に対し、 $s_1\mathbf{a}_1 + s_2\mathbf{a}_2 + s_3\mathbf{a}_3 = \mathbf{0}$ である時、 $(s_1, s_2, s_3) = (0, 0, 0)$ となる場合をいう。

- (b) 連立方程式 $A\mathbf{x} = \mathbf{0}$ が $\mathbf{x} = \mathbf{0}$ のみしか解を持たないための必要十分条件を、 A の行列式に関する等式で述べよ。

.....
 $A\mathbf{x} = \mathbf{0}$ の解が $\mathbf{x} = \mathbf{0}$ のみしかないということは行列 A の列ベクトルが線形独立である。行列 A の列ベクトルが線形独立であれば A は正則であるので $|A| \neq 0$ である。

逆に $|A| \neq 0$ であれば、 A は正則である。 A が正則であれば A の列ベクトルが線形独立である。 A の列ベクトルが線形独立であれば、 $A\mathbf{x} = \mathbf{0}$ の解が $\mathbf{x} = \mathbf{0}$ のみしかないことになる。

- (c) $\mathbf{a}_1 = \begin{pmatrix} 1 \\ 1 \\ 1 \end{pmatrix}, \mathbf{a}_2 = \begin{pmatrix} 1 \\ -1 \\ 5 \end{pmatrix}, \mathbf{a}_3 = \begin{pmatrix} 1 \\ 2 \\ -1 \end{pmatrix}$ が線形独立か線形従属か判定せよ。

.....
 $\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \mathbf{a}_3$ を列に並べて行列 A を作る。

$$A = \begin{pmatrix} 1 & 1 & 1 \\ 1 & -1 & 2 \\ 1 & 5 & -1 \end{pmatrix} \quad (15)$$

$|A| = 0$ であるため、行列 A は正則ではなく、 $\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \mathbf{a}_3$ は線形従属である。

6. 行列 $A = \begin{pmatrix} 3 & 1 \\ 5 & 2 \end{pmatrix}$ の表す線形変換を f とする時、 $f \circ f$ により点 $(1, -2)$ が移る点を以下のように求めよ。

- (a) $f(1, -2)$ が移る点を求めそれを (x, y) とした時、さらに $f(x, y)$ を求めよ。

.....

$$f(1, -2) = \begin{pmatrix} 3 & 1 \\ 5 & 2 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} 1 \\ -2 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 1 \\ 1 \end{pmatrix} \quad (16)$$

$$f(1, 1) = \begin{pmatrix} 3 & 1 \\ 5 & 2 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} 1 \\ 1 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 4 \\ 7 \end{pmatrix} \quad (17)$$

(b) $f \circ f$ を表す行列が A^2 であることから、 A^2 を計算し $(1, -2)$ が移る点を求めよ。

.....

$$A^2 = \begin{pmatrix} 3 & 1 \\ 5 & 2 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} 3 & 1 \\ 5 & 2 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 14 & 5 \\ 25 & 9 \end{pmatrix} \quad (18)$$

$$(f \circ f)(1, -2) = \begin{pmatrix} 14 & 5 \\ 25 & 9 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} 1 \\ -2 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 4 \\ 7 \end{pmatrix} \quad (19)$$

7. 行列 $A = \begin{pmatrix} 1 & 2 & 2 \\ 3 & -4 & -6 \\ -2 & 4 & 6 \end{pmatrix}$ について、以下の問いに答えよ。

(a) 行列 A の固有値を求めよ。

.....

固有値 λ を求めるために固有方程式 $|A - \lambda E| = 0$ を解く。

$$|A - \lambda E| = \begin{vmatrix} 1-\lambda & 2 & 2 \\ 3 & -4-\lambda & -6 \\ -2 & 4 & 6-\lambda \end{vmatrix} = -(\lambda + 1)(\lambda - 2)^2 \quad (20)$$

これより $\lambda = -1, 2$

(b) 行列 A の固有ベクトルを求めよ。

.....

固有ベクトル \mathbf{x} は固有値 λ に対し、 $A\mathbf{x} = \lambda\mathbf{x}$ を満たす。 $\mathbf{x} = \begin{pmatrix} x_1 \\ x_2 \\ x_3 \end{pmatrix}$ とする。

固有値が $\lambda = -1$ の時固有ベクトル \mathbf{x} は $(A + E)\mathbf{x} = 0$ を満たすので、

$$(A + E)\mathbf{x} = \begin{pmatrix} 2 & 2 & 2 \\ 3 & -3 & -6 \\ -2 & 4 & 7 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} x_1 \\ x_2 \\ x_3 \end{pmatrix} = 0 \longrightarrow \begin{cases} 2x_1 + 2x_2 + 2x_3 = 0 \\ 3x_1 - 3x_2 - 6x_3 = 0 \\ -2x_1 + 4x_2 + 7x_3 = 0 \end{cases} \quad (21)$$

と連立方程式を得る。これを解くと次の式が得られる。

$$3x_1 + x_2 = 0, \quad 2x_1 - x_3 = 0 \quad (22)$$

これを満たす解空間は

$$\left\{ x_1 \begin{pmatrix} 1 \\ -3 \\ 2 \end{pmatrix} \mid x_1 \in \mathbb{R} \right\} \quad (23)$$

で固有ベクトルは $\mathbf{x} = \begin{pmatrix} 1 \\ -3 \\ 2 \end{pmatrix}$

固有値が $\lambda = 2$ の時

$$(A - 2E)\mathbf{x} = \begin{pmatrix} -1 & 2 & 2 \\ 3 & -6 & -6 \\ -2 & 4 & 4 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} x_1 \\ x_2 \\ x_3 \end{pmatrix} = 0 \longrightarrow \begin{cases} -x_1 + 2x_2 + 2x_3 = 0 \\ 3x_1 - 6x_2 - 6x_3 = 0 \\ -2x_1 + 4x_2 + 4x_3 = 0 \end{cases} \quad (24)$$

となるので、 $-x_1 + 2x_2 + 2x_3 = 0$ を満たせばいい。この為、解空間は次のように表せる。

$$\left\{ x_2 \begin{pmatrix} 2 \\ 1 \\ 0 \end{pmatrix} + x_3 \begin{pmatrix} 2 \\ 0 \\ 1 \end{pmatrix} \mid x_2 \in \mathbb{R}, x_3 \in \mathbb{R} \right\} \quad (25)$$

固有値 -1 の固有ベクトルは $\begin{pmatrix} 1 \\ -3 \\ 2 \end{pmatrix}$ 、固有値 2 の固有ベクトルは $\begin{pmatrix} 2 \\ 1 \\ 0 \end{pmatrix}$ と $\begin{pmatrix} 2 \\ 0 \\ 1 \end{pmatrix}$

(c) 正則行列 P を $P^{-1}AP$ が対角行列になるように定め、その対角行列を答えよ。

固有ベクトルを列ベクトルとして並べ行列 P を次のように作る。

$$P = \begin{pmatrix} 1 & 2 & 2 \\ -3 & 1 & 0 \\ 2 & 0 & 1 \end{pmatrix} \quad (26)$$

この時、対角化行列は次のようになる。

$$P^{-1}AP = \begin{pmatrix} -1 & 0 & 0 \\ 0 & 2 & 0 \\ 0 & 0 & 2 \end{pmatrix} \quad (27)$$

8. 対称行列 A の異なる固有値に対応する固有ベクトルが、互いに直交することを示せ。

対称行列 A の固有値を λ, μ とし、 $\lambda \neq \mu$ とする。固有値 λ, μ に対応する固有ベクトルをそれぞれ $\mathbf{x}_\lambda, \mathbf{x}_\mu$ とおく。固有ベクトルの内積が 0 になることを示す。つまり、 $\mathbf{x}_\lambda \cdot \mathbf{x}_\mu = 0$ を示せばよい。

$$\lambda(\mathbf{x}_\lambda \cdot \mathbf{x}_\mu) = \lambda {}^t \mathbf{x}_\lambda \mathbf{x}_\mu = {}^t (\lambda \mathbf{x}_\lambda) \mathbf{x}_\mu = {}^t (A \mathbf{x}_\lambda) \mathbf{x}_\mu = {}^t \mathbf{x}_\lambda {}^t A \mathbf{x}_\mu \quad (28)$$

$$= {}^t \mathbf{x}_\lambda A \mathbf{x}_\mu = {}^t \mathbf{x}_\lambda \mu \mathbf{x}_\mu = \mu {}^t \mathbf{x}_\lambda \mathbf{x}_\mu = \mu (\mathbf{x}_\lambda \cdot \mathbf{x}_\mu) \quad (29)$$

この計算より $\lambda(\mathbf{x}_\lambda \cdot \mathbf{x}_\mu) = \mu(\mathbf{x}_\lambda \cdot \mathbf{x}_\mu)$ が得られる。そこで移項してまとめると $(\lambda - \mu)(\mathbf{x}_\lambda \cdot \mathbf{x}_\mu) = 0$ である。 $\lambda \neq \mu$ より $\mathbf{x}_\lambda \cdot \mathbf{x}_\mu = 0$ となり固有ベクトル $\mathbf{x}_\lambda, \mathbf{x}_\mu$ が直交することがわかる。

以下、発展課題

A. 転置行列と行列式に関する次の性質

(a) $|{}^t A| = |A|$

(b) ${}^t(cA) = c({}^t A)$

(c) ${}^t(A+B) = {}^t A + {}^t B$

を用いて、 A の固有値と ${}^t A$ の固有値が等しいことを示せ。

ヒント. 方程式 $|{}^t A - \lambda E| = 0$ の解と方程式 $|A - \lambda E| = 0$ の解が等しいことを示せばよい。つまり、 $|{}^t A - \lambda E| = |A - \lambda E|$ を示せばよい。

行列 A の固有値を λ とする。

$${}^t A - \lambda E = {}^t A - {}^t(\lambda E) = {}^t(A - \lambda E) \quad (30)$$

行列式は転置しても同じなので、

$$|{}^t(A - \lambda E)| = |A - \lambda E| \quad (31)$$

であるため

$$|{}^t A - \lambda E| = |A - \lambda E| = 0 \quad (32)$$

である、 A の固有値は ${}^t A$ の固有値であることがわかる。同様に ${}^t A$ の固有値は ${}^{tt} A = A$ の固有値であることがわかる。よって、 A と ${}^t A$ の固有値は一致する。

B. $B = P^{-1}AP$ である時、 B の固有値と A の固有値が等しくなることを示せ。

.....
行列 A の固有方程式 $|A - \lambda E| = 0$ に対し、正則行列 P とその逆行列 P^{-1} を両側からかける。

$$|P^{-1}||A - \lambda E||P| = |P^{-1}(A - \lambda E)P| = |P^{-1}AP - P^{-1}(\lambda E)P| = |P^{-1}AP - \lambda E| = |B - \lambda E| \quad (33)$$

これにより A の固有値 λ に対し、 $|B - \lambda E| = 0$ である。

また逆に $|B - \lambda E| = 0$ を満たす λ は $|P| \neq 0, |P^{-1}| \neq 0$ より $|A - \lambda E| = 0$ であることがわかる。

よって、 $B = P^{-1}AP$ の固有値と A の固有値が等しくなる。

C. 行列 $A = \begin{pmatrix} \cos \theta & -\sin \theta \\ \sin \theta & \cos \theta \end{pmatrix}$ の固有値が $\lambda = \cos \theta \pm i \sin \theta$ となることを示せ。

.....
固有方程式 $|A - \lambda E| = 0$ を計算すると

$$|A - \lambda E| = \begin{vmatrix} \cos \theta - \lambda & -\sin \theta \\ \sin \theta & \cos \theta - \lambda \end{vmatrix} = (\cos \theta - \lambda)^2 + \sin^2 \theta = \lambda^2 - 2\lambda \cos \theta + 1 = 0 \quad (34)$$

この λ についての 2 次方程式を解の公式で解くと

$$\lambda = \cos \theta \pm \sqrt{\cos^2 \theta - 1} = \cos \theta \pm \sqrt{-\sin^2 \theta} = \cos \theta \pm i \sin \theta \quad (35)$$